

# 1703年元禄地震における相模国足柄郡・ 駿河国駿東郡御厨・伊豆国東岸地域の被害数

矢 田 俊 文

## はじめに

本稿の目的は、確実な史料により、元禄16年（1703）11月23日に起った元禄地震における相模国・駿河国駿東郡・伊豆国東岸地域の被害と相模国足柄郡・駿河国駿東郡御厨・伊豆国東岸地域の1村当りの平均家屋倒壊数・死亡者数を明らかにすることにより、大きな被害を受けた地域の特徴を明確にすることにある。

元禄地震の当地域の研究については、すでに確実な史料を使用して戸塚宿から箱根宿までの東海道沿いの宿場の被害を明らかにした北原糸子「〔祐之地震道記〕の跡を辿る（東海道、戸塚～小田原）<sup>(1)</sup>」や小田原藩領の被害を明らかにした下重清「小田原藩領域の被害状況<sup>(2)</sup>」の優れた個別研究があるが、これらの研究は箱根以東の東海道筋や小田原藩領という特定の地域に限定された研究である。地震による被害は相模国・駿河国駿東郡・伊豆国のような広範囲の地域にわたっており、地震の特徴を明らかにするには、東海道や小田原藩領の検討だけでは不十分である。また、地域の被害の特徴は、1村当りの平均家屋倒壊数・死亡者数を求め他の地域と比較することによって導き出す必要があると思われる。

---

(1) 北原糸子「〔祐之地震道記〕の跡を辿る（東海道、戸塚～小田原）」『1703元禄地震報告書』内閣府、2013年

(2) 下重清「小田原藩領域の被害状況」『1703元禄地震報告書』内閣府、2013年

# 1 相模国・駿河国駿東郡御厨・伊豆国東岸地域における被害

## (1) 相模国・駿河国駿東郡地域の被害

1 では、確かな日記・記録によって、相模国・駿河国駿東郡地域における元禄地震の被害状況を検討する。

まず、「祐之地震道記<sup>(3)</sup>」によって東海道の元禄地震の被害状況を検討しよう。

「祐之地震道記」は梨木祐之ら京都下鴨神社神官一行が元禄16年に戸塚宿（横浜市）で地震に遭遇し、京都に無事帰還するまでの道中記である。戸塚宿から箱根宿までは、北原氏による各宿場における詳細な検討がある。本稿では、「祐之地震道記」から戸塚宿より西の東海道地域における地震被害の違いを明らかにしたい。

「祐之地震道記」には、地震被害からのがれ安全な宿泊先を探し、京都にたどり着いた状況が記されている。本史料には東海道の各宿の被害は大きくても、宿泊できる宿場が存在したことが記されている。その地点を確認しよう。

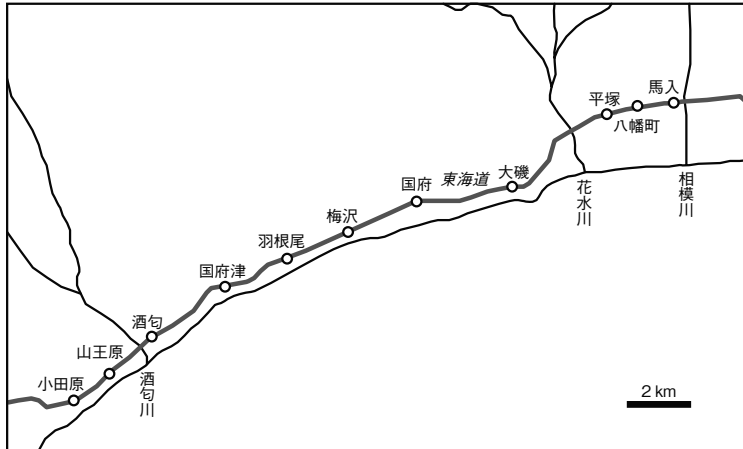
第1表の祐之地震道記東海道被害一覧は、「祐之地震道記」により通過点と宿泊地と各地点ごとの被害記事を表にまとめたものである。

まず第1表から被害の表記に注目してみよう。第1表17羽根尾村は「人家悉く倒れる」、18国府津村は「人家で柱が立っている軒は見えない」、19山王原村は「人家は悉く倒れる」、20酒匂村は「残る人家はない」、21小田原宿は「柱が立っている家は1軒もない」と、東海道の他の地域と比べて被害の甚大さを物語る言葉で綴られている。特に潰家の被害が「わずか」と表現される15国府村とは大きく異なる。第1表17羽根尾村から21小田原宿まで（第1図）の被害がいかに大きかったかを記している点に注目したい。

第1表17～21と同様に地震被害の甚大さを表現している地域を探してみよう。11～13は、17～21の被害表現と類似している。第1表11馬入村は「残る家なし、みな潰れる」、11八幡町は馬入村と同じ、12平塚宿は「残る人家なし」と表現されている。相模川から花水川間の馬入村・八幡町・平塚宿の家屋被害は、17羽根尾村から21小田原宿間と同様に被害は大きかったと記されている。

---

(3) 『神奈川県文化財調査報告第19集』神奈川県教育委員会事務局社会教育課、1953年



第1図 東海道図（馬入から小田原）

梨本祐之一行は避難先の上蔵田村（横浜市戸塚区、戸塚宿より約1キロメートル西に隣接する村）を26日に出発し、その日は大磯宿に宿泊した。翌27日には湯本に宿泊、28日には沼津宿に宿泊している（第1表）。梨本祐之一行は被害の大きかった平塚宿と小田原宿をさけて、大磯宿と湯本に宿泊していることがわかる。

宿泊した14大磯宿は第1表によると、過半は転倒か傾損、死者50人余とある。<sup>(4)</sup> また、「倒れていない家4、5軒あり」とも記されていて、軽微とは言えないものの壊滅的被害は受けていなかったことがうかがえる。大磯宿は被害がなかったわけではないが、「残る人家はない」と表現される平塚宿や小田原宿とは被害の様相が異なっていたといえよう。27日に宿泊した24湯本については「人家は少し倒れている」という表現にとどまっている。

(4) 死者50人は18国府津村・21酒匂村とほぼ同じで大きな被害のようにも見えるが、大磯宿と国府津村・酒匂村とは家数等の規模が異なるので、国府津村・酒匂村と比較すると被害率は低い。同時代の家数がわかる史料はないが、大磯宿は享和3年（1803）の家数605軒・人口2702人（大磯宿分間絵図書上、『大磯町史1 資料編 古代・中世・近世（1）』大磯町）、国府津村は宝永5年（1708）の家数159軒・人口1184人（村明細帳、『小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1』小田原市、1989年）、酒匂村は天保12年（1841）の家数は101軒（新編相模国風土記稿、『新編相模国風土記稿』雄山閣、1933年）である。

第1表 柘之地震道記東海道被害一覧（元禄16年）

番号	月 日	通過地	宿泊	潰 家	死 者	現 行 政地名	備 考
1	11月22日	戸塚	○	人家は悉く倒れる	死人多い	横浜市 戸塚区	宿泊先亭主十右衛門 家は転倒せず
2	22日	畠の中	○			戸塚区	
3	23日	上蔵田	○			戸塚区	
4	24日	上蔵田	○	40軒余	死人は1人 もいない	戸塚区	
5	25日	上蔵田	○			戸塚区	
6	26日	原宿		多く倒れる		戸塚区	原宿村
7	26日	藤沢		悉く傾損	30人余	藤沢市	飛脚1人含む
8		四谷		人家の半ばは転倒		藤沢市	立場
9		小和田		8～9軒	4人	茅ヶ崎市	人家数100軒あり
10		南湖		人家の過半は倒れ る		茅ヶ崎市	
11		馬入		残る家なし、みな 潰れる		平塚市	
12		八幡町		馬入と同じ		平塚市	
13		平塚		残る人家なし		平塚市	
14	申刻	大磯	○	過半は転倒か傾損	50人余	大磯町	倒れていない駅家 4、5軒あり
15	27日	国府		わずか		大磯町	
16		梅沢		6～7軒		二宮町	立場
17		羽根尾		人家悉く倒れる		小田原市	
18		国府津		人家で柱が立っ ている軒は見えず	50～60人ば かり	小田原市	
19		山王原		人家は悉く倒れる	30人ばかり	小田原市	史料は山王村
20		酒匂		残る人家はない	50～60人ば かり	小田原市	史料は酒匂川
21		小田原		柱の立っている家 は1軒もない	1600人程	小田原市	宿場の人の話。旅人 の数は不明
22		風祭				小田原市	
23		山崎				箱根町	
24		湯本	○	人家は少し倒れて いる		箱根町	
25	28日	畑村		6～7軒	4人	箱根町	死者は村人の話。う ち2人は往來の者
26		箱根関所		関所は傾損なし		箱根町	
27		関所辺り				箱根町	7～8軒残る
28		箱根宿			30人余	箱根町	
29		三嶋				三島市	
30		沼津	○			沼津市	
31	29日	江尻	○			静岡市	
32	12月1日	金谷	○			島田市	
33	2日	浜松	○			浜松市	
34	3日	赤坂	○			豊川市	
35	4日	藤川				岡崎市	
36	4日	宮	○			名古屋市	
37	5日	桑名	○			桑名市	
38	6日	坂の下	○			亀山市	
39	7日	水口				甲賀市	
40	7日	草津	○			草津市	
41	8日	賀茂				京都市	

出典)「柘之地震道記」

梨本祐之一行は戸塚宿から箱根を越えて東海道沿いに京都に無事にもどるために、より被害が少なく宿泊できる宿場を選択した。そして、的確な判断のもとに宿泊先を定め、駿河国沼津宿まで東海道を通過して被災地を抜け出した。

このような的確な判断はどのようにして可能であったのであろうか。東海道をひたすら西に向い現地で判断して安全な宿場を探し泊まったのであろうか。次にどのようなようにしてより安全な宿泊先を決めたのかについて検討しよう。

第2表 祐之地震道記被害情報一覧は、梨本祐之一行が無事に東海道を通過して京都に帰るためにどのような情報活動を行ったのかを一覧表にしたものである。一行は東海道筋の宿泊可能な地点の情報をあつめ、被害がより軽微な宿場（大磯・湯本・沼津）を選んで宿泊した。

大磯・湯本・沼津に宿泊することを決めたのはいつのことだったのであろうか。第2表によると、24日に戸塚宿から逃れて一時避難した上蔵田村において街道を通る飛脚を呼び招いて東海道の様子を聞いている（第2表9）。また同日、使者を戸塚宿に派遣して東海道の状況を調べさせている（第2表11）。さらに翌25日、使者を藤沢宿（藤沢市）まで派遣し、沼津宿から出てきた旅人に東海道の様子を聞いている（第2表14）。この時に入手した情報は、沼津（静岡県沼津市）は揺れが厳しいように思ったが、人家が転倒したことはない。畑村（箱根町）は被害が出ているが、湯本村（箱根町）はそれほどの被害はない。そのため旅客は湯本に泊るといふ。小田原は残った駅家は1軒もない。大磯（大磯町）は駅家が4、5軒残っている。旅人は大磯宿に宿泊するとのことだ、というものであった。25日に得た情報が判断の決め手となった。

こうして事前に入手した情報により、梨本祐之一行は小田原宿と畑村ではなく、大磯宿（26日泊）と湯本（27日泊）と沼津宿（28日泊）に宿泊地を選んだのである。

第2表 柘之地震道記被害情報一覧（元禄16年）

番号	日時	場所	情報元	収集した情報の内容
1	23日 夜	(島の中)	使を亭主の十右衛門のもとに遣わず。使帰って報告	宿中（戸塚）の人家はみな転倒して死人も多い
2	23日 巳刻	(島の中)	十右衛門、島中へ来て語っている	問屋も家が潰れて、宿中の者を取り沙汰する人もないとのこと
3		(島の中)	人を宿場に遣わし帰って語る	町の山方の家につき哀しくいたわしい事を見た
4		(島の中)	人を戸塚宿へ出す。上方、江戸飛脚の往来もあるのではと尋ねさせると、誰いともなく語った話	藤沢の方も、道に大木が転倒して通路なし。川崎よりこちら側の宿々は家一軒もなく、通路は絶たれている
5	23日 午刻	(島の中)	伊賀守、下部に宿中の倒れていない家を探しに行かせる	町より西の山上の寺へ到って見ると、それより山の西の在郷へ行って宿を求めたが、1軒も傾損していない家はない
6		上蔵田	この所の百姓が来て語る	戸塚の前夜の火事は、家が崩れ倒れると火が出た。隣家は類焼。焼死する者4、5人あり
7	23日 夜8ッ	上蔵田		西山の向こうに火事の煙が見える
8	23日 夜中	上蔵田	村人に尋ねる	戸塚の西山の上に、松明の影が止まないうで見える。村人に尋ねると、あれは宿場の死人を、山の上の寺へ葬るために運んでいるのだ
9	24日 辰刻	上蔵田	旅宿の前の街道を飛脚一人が通る。呼び招いて聞いた話	小田原も大地震で、宿中の家は転倒した。その時、城内から火が出て、宿は焼亡したと口々に風聞あり。大磯からこちらの宿も、悉く転倒して旅宿ができないという
10	24日	上蔵田	今日戸塚で	宿の死傷の者100人余あり。その内に往來の旅人もあるという
11	24日	上蔵田	使を戸塚宿に派遣して、上方道中筋の事を調べさせた	昨日三嶋を出発した旅人に会って尋ねると、三嶋も揺れたが戸障子などが倒れた程度で人家が崩れたる所はない。箱根時の宿は転倒したが関所は倒れていない。畑村は人家が倒れている。坂の下方は、二子山の岩石が崩れ落ちて、道を塞ぎ徒行の者は岩の間を通っている。荷物は通ることができない。小田原は宿中が焼亡。大磯・平塚・藤沢の駅も、人家が倒れて駅路の便なしということだ
12	24日 申刻	上蔵田	伊賀守、鎌倉一見のために出かけて、申刻頃に帰って語っている	ここから鎌倉までの在郷、悉く家が潰れているように見える。鎌倉の在所も、人家は悉く転倒している。円覚寺門前の在家200軒ほどもあるように見えるが悉く倒れた。雪下の町は、少し倒れている。由井浜の辺は、津浪が打ち寄せて通ることができないと村人が語るの、行ってはいないとのこと
13	25日 夜	上蔵田	江戸から両使來臨して対面	江戸表は何事もないとのこと
14	25日 午刻	上蔵田	使を藤沢宿に派遣する。沼津より出た旅人に逢ったので尋ねる	沼津は揺れが厳しいように思ったのだが、人家が転倒したことはない。畑村は被害が出ているが、湯本村はそれほどの被害はない。そのため旅客は湯本に泊るという。小田原は、駅家は1軒もない。大磯は、駅家4、5軒残っている。旅人はここ（大磯宿）に宿泊するとのことだ

番号	日時	場所	情報元	収集した情報の内容
15	26日	南湖		石尾阿波守宿取の家来、江戸に帰る
16	26日 申刻	大磯	大磯宿の亭主、出て 来て語る	地震の後日、海の潮が虚ること2町余あった。これにより、津浪が打ち寄せるといふことで、宿中(大磯)が大騒ぎになり、男女とも山に仮屋を造って連れ出て日を過ぎた。昨日の夕方、ようやく家に帰る者もでてきた。しかし女と童は、今朝まで山にいた。今日は海の面も風静になってほっとしたという。22日の夜、地震の時、高浪が来て、沖の漁舟の多くが破損した。大磯の浦に500石積の舟と300石積の舟が2艘係留されていた。高浪が来て2艘の舟は引き汐により沖へ漂い、また打よせる浪で300石積の舟は、磯へ2町程打ち上げた。500石積の舟は磯際で船人が碇をおろして留っていた。船も人も難をまぬがれ、翌朝23日、2艘の船は伊豆の島へ帰って行ったという
17	27日 夜明け	切通	切通というところに 地藏堂がある	山が崩れて堂が埋まった。坊主2人が埋り命を失うという。鐘も落ちて大道の側に横たわっている
18	27日	国府津	村人が語った話	この街道より外の在郷も人家多く転倒して多く転倒して出火したところがある。その所の人は多く死去した
19	27日	酒匂川在所	村人が語った話	家が倒れると同時に火が出た。家人9人が家屋の下敷きになり、内から助けてくれと呼び叫んだが、近づく者は誰もいなかった。9人のうち2人は、火の中から這い出て助かり、7人は家の下敷きになって焼け死んだ。類焼は1軒あった
20	27日	小田原	宿場の人に尋ねた	宿中の男女1600人程が命を失った。往還の旅人の数は不明である。たまたま家を逃げ出た者は、海辺に逃げ迷って潮に取られた。それらの人数がどれほどかはわからない。
21	27日	小田原	古老が語った話	小田原大地震は、71年以前にあるという
22	27日	小田原	宿場の人が語った話	小田原合戦は120年以前の1月17日のことである。その後、築いた城であるが、この時、焦土となった
23	27日	湯本	亭主が語った話	前夜まで地震が止まない。風祭(小田原市)よりこの村に至るまでは、家の中で寝る者はいない。後ろの山に登って夜を明かす
24	28日	これより三 島迄	三島宿の人が語った 話	土肥・伊東・宇佐美・熱海は、22日の夜、津浪で人家が多く没した。熱海は人家500程ほどの在所。わずかに10軒ばかり残ったという
25	28日	これより三 島迄	沼津宿の人が語った 話	宇佐美(伊東市)という所へ、沼津の者が2人行って、22日の夜津波に遭った。津浪が打ち寄せると、この2人の者は家の柱に抱きついてしたが、しばらくして、目を開けて見ると、宇佐美の在郷は家1軒もなく、浪に取られていた
26	28日 申刻	沼津	宿の亭主が語った話	この日は大磯の潮が虚て、津浪が打ち寄せるといって、宿場の人々はみな家を出て、山方に仮屋を作り、財宝を持ち運んで、23日より昨日まで過ごした

出典)「祐之地震道記」

## (2) 駿河国駿東郡御厨・伊豆国東岸地域の被害

次に駿河国駿東郡御厨地域と伊豆国東岸地域の被害について、駿河国駿東郡熊堂（静岡県沼津市）の僧教悦の地震覚書（以下、「僧教悦地震覚書」と駿東郡茶畑村（静岡県裾野市）名主柏木家の「覚書帳」（以下、「柏木甚右衛門覚書帳」）によって検討する。駿東郡御厨地域とは、伊勢神宮領の大沼鮎沢御厨に由来し、近世においても御厨という地名が用いられた地域一帯のことで、現在の御殿場市、小山町や裾野市の一部を含む地域がこれにあたる。

まずはじめに熊堂の僧教悦の地震覚書から検討する。この史料は、元禄16年11月23日に起こった地震（元禄地震）について、駿河国駿東郡東熊堂大泉寺（沼津市）の僧教悦が、翌元禄17年（1704）2月5日に書き記したものである。本史料の検討については、若林淳之による詳しい説明があるが、若林氏の関心はもっぱら富士山の噴火<sup>(7)</sup>についてであり、ここでは元禄地震の被害について検討したい。

以下、「僧教悦地震覚書」のうち本稿で検討する記事を掲げる。

### （史料1）

駿河之国ヨリ東、相州箱根小田原取分大分ニユリ、家皆ユリツブレ、火事出来、人大分ニ損ジ、大久保加賀ノ守殿城モユリツブレシヤケ、人モ不知数ヲ死ス、伊豆之国之内モ、下田ヨリ東浦浜方ノ分、皆津波上リ、家モ人モ皆ナ破損ナリ、関東小田原ヨリ東ノ方ヘ向キタル浜方ノ分ハ、東ノハテマダ無残破損イタシ、人モ家モスキトツブレ、惣メ地震ト波トデ打死スル仁、惣合三十万余ト書上申ス、是ヨリ西国ノ方ハ地震モ少ク波モナシ、是ヨリ山家ノ方ハ、天盛ヨリ上尾尻ヨリ、ソロソロ地震強クユリ、二枚橋ヨリ御殿場・竹ノ下ナド、云処ハ、家モスキトツブレ、人モ大分ニ死ス、大地七尺、八尺ホドツ、ワレ、山ナドモ崩レ、寺ナドモブチウメ夥敷事也、扱此

(5) 『静岡県史料 第一輯』角川書店、1966年

(6) 若林淳之「自然災害誌の方法—元禄・宝永地震と宝永噴火の場合—」『静岡県史研究』10号、1994年

(7) 小山真人氏（同『富士山噴火とハザードマップ』古今書院、2009年）は、この記事から、元禄関東地震によって刺激を受けた富士山下のマグマが上昇して群発地震を起こしたと理解している。小山氏も本史料については、富士山の鳴動についてのみ注目している。



辺ハ同<sup>ハ</sup>廿一日ヨリ、日ニ五度三度ホドヅ、ユル、明ル正月末マテソロソ  
ロユリ、ミクリヤナドハ、ツネモ大ユリニテ、小屋ニテ年ヲ取ナ<sup>(御 厨)</sup>□、此辺  
ニテハ、小屋ニ□ハ住ルコトハ極月十三日ノ比マデ夜□申、極月廿八日ナ  
ドニハ、ヨホドツヨクユリ、ミクリヤナドハ、朝<sup>ハ</sup>卯ノ刻ヨリユリ出シ、  
一日ユリ、小屋ナドヲモユリクツスヤウニユリ、皆々迷惑仕、地震大分ニ  
ユリ候、<sup>(極)</sup>□月廿二日ノ夜斗ナレドモ、小田原筋ニテ人大分死去スル故ニ、  
此辺モ用心イタシ油断イタズ、夜ニ取分シケクユリ候ユヘニ、油断ナリガ  
タク候、

本史料の元禄地震の記述を要約すれば、次のようになろう。

駿河国より東、相州箱根・小田原が大いに揺れ、家はみな揺れ潰れ、火事が発生し、多くの人が被害を受け、大久保加賀守殿の城（小田原城）も揺り潰れて焼け、多くの人が死んだ。伊豆国のうちも下田から東浦（伊豆国東海岸）浜方の地域はみな津波が襲い、家も人もみな破損した。関東小田原から東方の浜方地域は、東の果てまで残らず無惨に破損し、人も家も完全に潰れ、総じて地震と波（津波）とで死んだ者は、総計30万余と書き上げ報告した。

ここ（沼津市熊堂地域）から西国の方は地震も少なく波（津波）もなかった。ここ（沼津市熊堂地域）から山家（静岡県御殿場市・小山町地域）の方は、天盛より上尾尻（御殿場市南部地域）より、ゆっくりと地震が強く揺れ、二枚橋（御殿場市中心部）から御殿場（御殿場市中心部）・竹之下（小山町中心部）などという所は、家も完全に潰れ、人も多く死んだ。地面は七尺、八尺ほどずつ割れ、山なども崩れ、寺なども埋めてしまうなどひどい状況であった、となろう。

史料1「僧教悦地震覚書」の記事で重要な点は、次の3点である。

- ① 伊豆国では下田から伊豆国東岸地域は、津波が襲い家も人も破損した。
- ② 静岡県沼津市熊堂地域から西国の方は地震も少なく津波もなかった。
- ③ 沼津市熊堂地域から御殿場市・小山町地域は、御殿場市南部地域よりも、ゆっくりと地震が強く揺れ、二枚橋から御殿場（いずれも御殿場市中心部）・竹之下（小山町中心部）などは、家も完全に潰れ、人も多く死んだ。

記事のうち伊豆国東岸地域が津波に襲われ大きな被害を受けたことは重要であるが、それよりもさらに史料1を記した僧教悦が居住する駿河国駿東郡の地

震被害記事は重要である。史料1によると、沼津市熊堂地域から西国の方は地震も少なく津波もなかった。さらに駿東郡のうちでも小山町地域・御殿場市地域の被害が大きかった、という。

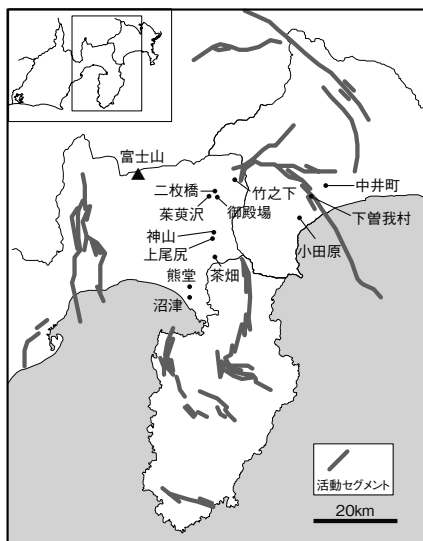
駿東郡地域の地震被害を記した史料をさらに検討しよう。次の史料2「<sup>(8)</sup> 柏木甚右衛門覚書帳」は、茶畑村(裾野市)の名主柏木家に伝来した史料で、天和3年(1683)2月5日から享保4年(1719)まで37年間記載されている覚書である。

(史料2)

御厨ぐみ沢村より北方竹之下迄、家共皆禿申候、此通神山より下ハ家禿不申候

史料2には、駿東郡御厨地域の茶畑沢村(御殿場市)から北方の竹之下(小山町)までは、家はみな潰れた。神山(御殿場市)より下は、家は潰れていないとある。このように駿東郡御厨地域の被害状況を記したのは、駿東郡茶畑村(裾野市)の名主柏木甚右衛門である。史料1と同様、同じ郡に居住する者が、自らが知り得た被害状況を記した史料として重要である。

第2図をみると、史料1・2に記された駿東郡の村の位置がわかる。史料1と2で駿東郡のうちで被害が大きかったと記された茶畑沢・二枚橋・御殿場・竹之下は家も潰れなかったとする神山以南と比べると駿東郡の北部に位置し、史料1と史料2の記述が一致していることがわかる。



第2図 相模国足柄郡と駿河国駿東郡地域  
注) 活動セグメントは産業技術総合研究所の活断層データベースによる。

(8) 裾野市史編さん専門委員会編『柏木甚右衛門覚書帳 湯山安右衛門日記』(裾野市史資料叢書1) 裾野市教育委員会市編さん室、1990年

「僧教悦地震覚書」(史料1)と「柏木甚右衛門覚書帳」(史料2)では駿東郡における地震被害の地域的な差異が一致することから、元禄地震は御殿場市地域・小山町地域の被害が大きく、神山(御殿場市)以南の駿東郡の被害は小さなものであったということは間違いないと考えられる。

また、「祐之地震道記」には、沼津宿以西はそれほどの被害がなかったと書かれているが、これも史料1の沼津市熊堂地域から西国の方は地震も少なく津波もなかったという記事と同じであり、沼津市以西の被害は小さなものであった点も確かなことと思われる。

## 2 相模国足柄郡・駿河国駿東郡御厨・伊豆国東岸地域の 1村当たり平均家屋倒壊数・死亡者数

1では、3つの確かな日記・記録から相模国・駿河国駿東郡の被害状況をみてきた。2では、幕府へ報告された被害報告書等の文書を使用して相模国足柄郡地域・駿河国駿東郡御厨・伊豆国東岸地域の1村当たり平均家屋倒壊数・死亡者数を検討する。

第3表は、相模国足柄郡・駿河国駿東郡御厨・伊豆国東岸地域の1村当りの家屋倒壊数の一覧である。第4表は、相模国足柄郡・駿河国駿東郡御厨・伊豆国東岸地域の1村当たり死亡者数の一覧である。第3表・第4表ともに1703年元禄地震以外の地震で被害の特質を1村当りの被害数で説明できる地域の数値も比較のために加えている。第3表には、村数と家屋倒壊数が同一の史料でわかる越後国高田藩岩手組(1751年高田地震)と越後国長岡藩栃尾組(1828年三条地震)の1村当りの被害数を入れている。高田藩岩手組7か村は1751年高田地震の比較的軽微な地域である<sup>(9)</sup>。長岡藩栃尾組6か村は活断層のすぐ側にある地域であり、1828年三条地震における最大の被害地である<sup>(10)</sup>。第4表では、津波による被害で多くの死者を出したことが明瞭な新宮(和歌山県新宮市)より以東の紀州藩奥熊野地域の1村当りの死亡者数を掲げた。

---

(9) 矢田俊文・卜部厚志「1751年越後高田地震による被害分布と震源域の再検討」『資料学研究』8号、2011年

(10) 矢田俊文・卜部厚志「1828年三条地震による被害分布と震源域の再検討」『資料学研究』7号、2010年

第3表 元禄16年(1703)相模国足柄郡・駿河国駿東郡御厨・伊豆国東岸地域家屋倒壊数(1村当り)

番号	支配地域名	a. 村数	b. 潰家数 (軒)	c. 倒壊数 (軒)	地震名
1	小田原藩相模領	151	6341	41.99	1703年元禄地震
2	相模稲葉正直領	9	589	65.44	1703年元禄地震
3	小田原藩駿河領	67	836	12.48	1703年元禄地震
4	駿河稲葉正辰領	6	214	35.67	1703年元禄地震
5	小田原藩伊豆領	17	476	28.00	1703年元禄地震
6	長岡藩栃尾組	6	524	87.33	1828年三条地震
7	高田藩岩手組	7	124	17.71	1751年高田地震

典拠) 1・3・5は「近世小田原史稿本 下巻二」(小田原市立図書館所蔵)。2・4は「楽只堂年録」。6は「三条大地震風聞書」(『新潟県史 資料編7 近世2 中越編』)。7は国立国文学研究資料館所蔵 佐藤家文書。注1) 潰家は全壊・半壊を含む。注2) cはb/a(1村当り家屋倒壊数)

第4表 元禄16年(1703)相模国足柄郡・駿河国駿東郡御厨・伊豆国東岸地域死亡者数(1村当り)

番号	地域名	a. 村数	b. 死者 (人)	c. 死亡者数 (人)	現行政地名	地震名	備考
1	小田原藩相模領	151	746	4.94	小田原市等	1703年元禄地震	
2	相模稲葉正倚領	9	12	1.33	中井町	1703年元禄地震	
3	小田原藩駿河領	67	37	0.55	御殿場市ほか	1703年元禄地震	
4	駿河稲葉正辰領	6	20	3.33	小山町ほか	1703年元禄地震	
5	小田原藩伊豆領	17	639	37.59	伊東市・熱海市	1703年元禄地震	海沿いの村は10
6	長岡藩栃尾組	6	113	18.83	長岡市	1828年三条地震	活断層付近の村
7	高田藩岩手組	7	1	0.14	上越市	1751年高田地震	
8	紀州藩奥熊野	34	1276	37.53	三重県尾鷲市等	1707年宝永地震	熊野灘に面した浦

典拠) 1・3・5の死亡者数は「近世小田原史稿本 下巻二」(小田原市立図書館所蔵)、村数は「御朱印高」(『小田原市史 史料編 近世II 藩領1』)による。2・4の死亡者数は「楽只堂年録」。6は「三条大地震風聞書」(『新潟県史 資料編7 近世2 中越編』)。7は国立国文学研究資料館所蔵佐藤家文書。8の死亡者数は朝林(名古屋市立蓬左文庫所蔵)、村数34は「紀伊統風土記」紀州藩奥熊野の熊野灘に面した村(『紀伊統風土記』は天保10年(1839)完成)の奥熊野の絵図と南紀徳川史の浦名による。注1) 8紀州藩奥熊野の尾鷲は林浦・南浦・中井浦・堀北浦・野地村5ヶ村を合わせたものなので、5村を1村として扱う。注2) cはb/a(1村当り死亡者数)

1村当たり平均家屋倒壊数・死亡者数を検討するには確実な被害者数を用いなければならない。先にみた「祐之地震道記」には小田原宿中の男女1600人程が命を失ったと記されているが(第2表20)、この数字ははたして正確であろうか。小田原藩が幕府に報告した被害報告書に記される町家の死者数は651人であった。ここには半潰・焼失等家屋の被害数が記載されている。また死者はこのほかに旅人44人、家中137人にのぼる。旅人から家中のすべてが小田原で死去したとして合計すると、小田原の死者は832人であり、「祐之地震道記」とは死者数が違いすぎる。

小田原宿中の男女1600人程という情報は、小田原宿の人に尋ねて得た情報である。重要な情報ではあるが、情報元の小田原宿の人がどこから得た情報なのか不明であるので、やはり藩が把握した死者数に従うのが妥当であると考えられる。現地の人に聞いた被害数よりも、藩・幕府が把握した被害数に依拠して家屋倒壊数・死亡者数を割り出すべきであろう。

次には被害数を地震被害時の村の家屋数・人数で除すことが望ましいが、地震被害時の村の人数を把握できる史料はそれほど多くない。また、人数がわかる史料があったとしても、その人数が何歳から何歳までの村の人数かを確定しなければ分析の材料として使用することはできない。

よって、地震被害時の人数がわかる史料がない場合は、死亡者数を家屋数で除して1軒当りの死亡者数を出す方法が有効である。すでに1751年越後高田地震の分析において、山崩れによる1軒当りの死亡者数を割り出し、地震の特質を導き出すことに成功している<sup>(12)</sup>。

では、地震被害時の村の家屋数が記されている史料がない場合はどうすればいいのか。その場合は、1村当りの死亡者数によって被害の地域的特質を明確にできるのではないか。

1村当りの被害数を出す場合、地震被害時の村数の把握が重要となる。第3・4表の村数は被害数が記された史料には記されていない。第3・4表で

---

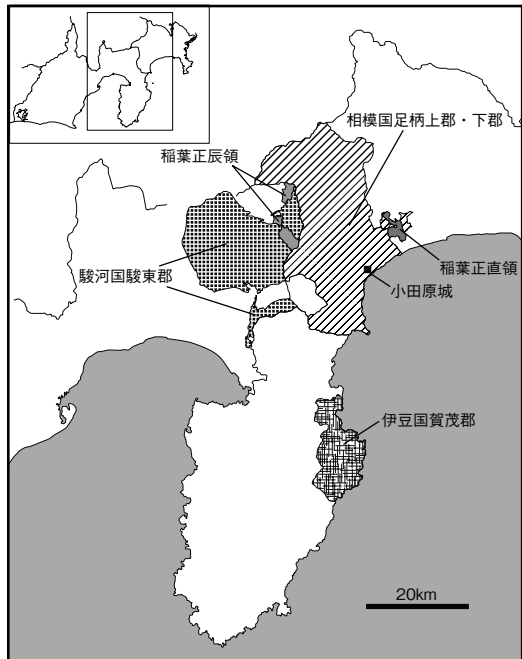
(11) 「近世小田原史稿本 下巻二」所収(小田原市立図書館所蔵)。下重清氏も本史料によって元禄地震の被害数を検討されている(下重清前掲「小田原藩領域の被害状況」)。

(12) 矢田俊文・卜部厚志前掲「1751年越後高田地震による被害分布と震源域の再検討」

<sup>(13)</sup>  
は、村数は、「御朱印高」による。

「御朱印高」は大久保氏小田原藩領知の村ごとの石高を記したもので、拝領高11万3120石余、郡数13郡、村数336ヶ村とあり、貞享3年（1686）朱印高とは数値が異なる。「御朱印高」には、元禄7年（1694）年加増分、河内国3郡1万石が記載されており、さらには、宝永5年（1708）に富士山噴火のため上地替となった村々（相模国足柄上郡など）が記載されている。また、相模国足柄上郡・同下郡・駿河国駿東郡において、貞享3年に大久保氏が拝領した村々のうち本史料に掲載されていない村があるが、その村は元禄11年の大久保忠増襲封の際、小田原藩領から分知された大久保教寛領、大久保教信領や旗本領となった村である。よって「御朱印高」は、元禄11年（1698）以降、宝永5年（1708）上地替以前の小田原藩領の村ごとの石高を記した史料である。「御朱印高」の村数は元禄16年の元禄地震時の村数と同じであると考えられる。

第3表の小田原藩領1・3・5のうち、相模領（第3表1）は151か村、駿河領（第3表3）は67か村と広大である（第3図）。第3表1・3は範囲が広すぎて地域の特徴が把握しにくい。地域の被害の特色を明らかにするためには、10か村程度の地域の被害情報によって特色を把握することが重要である。そのためには第3表の1・3の近くに被害情報がある



第3図 小田原藩領・稲葉正辰領・稲葉正直領

(13) 『小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1』小田原市、1989年

のが望ましい。

さいわい「楽只堂年録」<sup>(14)</sup> 卷133には幕府へ提出した元禄地震の被害報告書があり、小田原藩領の相模領や駿河領に至近の知行所の被害報告書がある。そのひとつ、小田原藩相模領と隣り合う稲葉河内守知行所の被害報告書を取り上げると史料3のように記されている。稲葉河内守正直は稲葉正則の五男で、はじめ大学、元禄13年（1700）8月28日、従五位下河内守に叙任される。<sup>(15)</sup>

（史料3）

稲葉河内守知行所相州足柄郡之内

高二千石

中村之内九ヶ所

一、潰家 五百八拾九軒、内寺二ヶ寺

一、死人拾二人、内 男三人  
女八人  
出家老人 怪我人五拾三人

一、損馬 三疋

一、田畑山崩荒、道・橋・川除堤等多ヶ損

稲葉河内守の所領は元禄郷帳<sup>(16)</sup>によると、遠藤村・北田村・田中村・半分形村・久所村・藤沢村・此奈窪村・松本村の8か村（以上、神奈川県中井町）と北田村の南に隣接する御料所・大久保長門守知行の相給小竹村1か村（小田原市）の計9か村である。これが史料3の「高二千石、中村之内九ヶ所」に当たるものと思われる。

史料4は稲葉紀伊守知行所の被害報告書である。稲葉紀伊守は稲葉正則の四男正辰で、元禄6年（1693）12月18日、従五位下紀伊守に叙任されている。<sup>(17)</sup>

---

(14) 柳沢文庫

(15) 「寛政重修諸家譜」卷609、『新訂 寛政重修諸家譜 第10』続群書類従完成会、1965年

(16) 関東近世史研究会校訂『関東甲豆郷帳』近藤出版社、1988年

(17) 「寛政重修諸家譜」卷609、前掲『新訂 寛政重修諸家譜 第10』

(史料4)

稲葉紀伊守知行所駿河国駿豆郡之内地震<sup>(ママ)</sup>ニ而損亡

御厨之内  
高千百石余村数六ヶ村

一、潰家 二百拾四軒、内寺二ヶ寺

一、死人二拾人、内<sup>男十三人</sup>怪我人 廿九人  
<sup>女七人</sup>

一、損馬 貳疋、怪我馬 五疋

一、田畑山崩大破大分永荒、井堰潰、村道茂通路絶候由、

<sup>(18)</sup>  
元禄15年諸国郷帳によると、稲葉正辰の所領は、柳島・新柴・桑木・吉久保・大胡田・下古城(大久保隠岐守との相給)(以上小山町)・久根・深良(裾野市、同村には興禅寺領・西安寺領あり)の8か村である。史料4では6か村とあり、この2か村の違いは不明である。そこで、第3図では、8か村の地域を図示しているが、第3・4表では、史料4の村数に従い6か村とした。

次に第3・4表の1村当りの被害数は検討のために有効であるかどうかについて検討しておきたい。

第5表は、第4表に掲げた長岡藩栃尾組と高田藩岩手組の1軒当りの死亡者数である。これによると、第5表1長岡藩栃尾組は20.8人、第5表2高田藩岩手組は0.5人である。同じ地点の1村当りの死亡者数は、第4表6長岡藩栃尾組は18.83人、第4表7高田藩岩手組は0.14人となっていて、第5表と第4表の数値に大きな差異は認められない。したがって1村当りの死亡者数でも1軒当りの数値とかわらない正確な被害数を示すと考えられる。

第5表 地震による死亡者数(1軒当り)

番号	地域名	a.村数	b.総戸数	c.死人 (人)	d.死亡者 (人)	地震名
1	長岡藩栃尾組	6	543	113	20.8	1828年三条地震
2	高田藩領岩手組	7	192	1	0.5	1751年高田地震

典拠) 1は「三条大地震風聞書」(『新潟県史 資料編7 近世2 中越編』)、2は国立国文学研究資料館所蔵佐藤家文書。注) dはc/a(1軒当りの死亡者数)

(18) 『静岡県史 資料編9 近世一 付録郷帳』静岡県、1992年



以下、第3・4表から明らかにできることを見ていこう。まず、1村当り家屋倒壊数について検討する。

第3表3小田原藩駿河領分の1村当り家屋倒壊数は12.48軒、死亡者数は0.55人である。それに対し、駿東郡北部の御殿場市・小山町地域に多くの所領を持つ稲葉正辰領は1村当り家屋倒壊数35.67軒、死亡者数3.33人である。駿河国駿東郡地域の中では1村当りの家屋倒壊数・即死者数は御殿場市・小山町地域が大きい。しかし、小田原藩相模領の1軒当り家屋倒壊数は41.99軒、死亡者4.94人であり、静岡県御殿場市・小山町地域は相模国足柄郡地域と比較すると1村当り被害数は少ない。

小田原藩相模領の1村当り家屋倒壊数は41.99軒である（第3表1）。それに対し、小田原藩領と近接（第3図）する稲葉正直領の1村当り家屋倒壊数は65.44軒にのぼる（第3表2）。稲葉正直領（中井町地域）の1村当りの家屋倒壊数は、小田原相模領・駿河領の中で最も高い。ちなみに、第3表で最も高い1村当り家屋倒壊数は1828年三条地震被災地の長岡市栃尾組6か村（第3表6）で87.33軒にのぼる。この数字の大きさは、長岡市栃尾組6か村が活断層すぐ側に位置する地域であることによる。

次に1村当り死亡者数について検討する。第4表によると、小田原藩伊豆領の1村当り死亡者数37.59人は他の地域と比較してきわめて多いことがわかる（第4表5）。この死亡者数は、1707年宝永地震の際、津波によって多くの死者を出した紀州藩奥熊野の1村当り死亡者数37.53人に匹敵する（第4表8）。小田原藩伊豆領は伊豆国東岸にある（第3図）。すでに「祐之地震道記」や「僧教悦地震覚書」でみたように、元禄地震では伊豆国東岸地域は津波によって大きな被害もたらされた。小田原藩伊豆領1村当り死亡者数が37.59人と多い理由は津波によるものであることがわかる。

活断層のすぐそばに位置している長岡藩<sup>(19)</sup>栃尾組6か村（第4表6）の1村当り死亡者数18.83人は他の地域と比較すると多いことはすでに述べた。しかし、第4表の5・8と6を比較すると、はるかに5・8の方が多い。これは活断層すぐそばの死亡数よりも、津波による死亡数の方がはるかに多いことを示している。

---

(19) 矢田俊文・卜部厚志前掲「1828年三条地震による被害分布と震源域の再検討」

## お わ り に

以上、1703年元禄地震における相模国・駿河国駿東郡御厨・伊豆国東岸地域の被害と相模国足柄郡・駿河国駿東郡御厨・伊豆国東岸地域の1村当りの家屋倒壊数と死亡者数を検討した。本稿で明らかにした点は、以下の6点である。

- ① 大磯宿は平塚宿よりも被害は軽微であるため、宿泊することができた。
- ② 湯本宿の被害は他と比べ軽微であるため、宿泊することができた。
- ③ 駿河国沼津宿の被害は軽微であるため、宿泊することができた。
- ④ 御殿場市・小山町地域の1村当りの平均被害数は、駿河国駿東郡地域の中では多いが、相模国足柄郡地域と比較すると少ない。
- ⑤ 稲葉正直領（中井町地域）の1村当りの平均家屋倒壊数は、小田原藩相模領・駿河領と比べて多い。
- ⑥ 小田原藩伊豆領の1村当りの死亡者数は第4表の他の地域と比較してきわめて多い。

最後に、以上の①～⑥の結論になった地域の特質と要因について論じることにする。

大磯宿と平塚宿の被害の違いは地盤の違いによるものと思われる。<sup>(20)</sup>大磯と平塚は1912年大正関東地震でも被害を受けているが、この時も大磯よりも平塚の方が被害は大きい。この被害の違いについて、『神奈川県震災誌』<sup>(21)</sup>は、大磯町の地盤は岩石なので市街地の潰家は少ない。これに反して平塚町は激高を極めた、と記している。1912年大正関東地震と同様に、1703年元禄地震においても相対的に地盤がよい大磯宿は、平塚宿と比較して被害が少なかったと考えられる。

稲葉正直領の1村当りの家屋倒壊数が小田原藩相模領・駿河領の中で最も高い理由は、稲葉正直領（中井町地域）が活断層（第2図）に近い地域であるためと考えられる。また同様に御殿場市・小山町地域の1村当り被害数が駿河国駿東郡地域の中で高い理由は、御殿場市・小山町地域が活断層（第2図）により近いためと考えられる。小田原藩伊豆領の1村当り死亡者数は他の地域と比較してきわめて大きいですが、それは被害が津波によるものであると考えられる。

---

(20) 平塚市博物館『夏期特別展 平塚周辺の地盤と活断層』平塚博物館、2007年、平塚市博物館『平塚周辺の地盤図』平塚博物館、2007年

(21) 神奈川県『神奈川県震災誌』神奈川県、1925年

(付記)

小田原市立図書館地域資料室には史料調査でお世話になりました。また、ご教示いただき感謝いたします。

---

(22) 1923年大正関東地震では、活断層付近の下曾我村の全壊率は95%、同じく曾我村は80%ときわめて高い(神奈川県『神奈川県震災誌』神奈川県、1927年)。諸井孝文・武村雅之「関東地震(1923年9月1日)による木造住家被害データの整理と震度分布の推定」(『日本地震工学会論文集』第2巻第3号、2002年)によると、神奈川県のなかでは下曾我村が全壊率第1位で、曾我村は第5位である。第2位は神田村(平塚市)、第3位は有馬村(海老名市)、第4位は相川村(厚木市)であり、第2位から第4位の神田村・有馬村・相川村はすべて相模川の近くにあり地形は後背湿地(平塚市博物館前掲『平塚周辺の地盤図』)に分類される。